



Title	17世紀の牧人小説
Author(s)	福沢, 栄司
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1975, 15, p.187-196
Issue Date	1975-01-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/9640
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T10:22:19Z

17世紀の牧人小説

福 沢 栄 司

Der Schäferroman des 17. Jahrhunderts

EIJI FUKUZAWA

I

大方のジャンルにもれず、牧人小説というジャンルの妥当有効領域もはなはだ疑しい。ジャンル論には個々の作品の独自性を欠落させてしまう危険性が常につきまとうし、ともすればその分類は文学を文学たらしめているものを取残したままであったり、文学性とは最初から無縁であったりする。それだけにジャンルの明確化を期すれば期するほど、逆にますます曖昧な、いか様にも解釈可能な不明確なものとならざるをえない。

牧人小説の第1のメルクマールはその小説が牧人世界、田園生活を舞台としているか否かにあり、それは小説構成上の問題であって純客観的に分類しうる。だがその牧人小説をさらにいくつかのタイプ、たとえば Heinrich Meyer のように社交的牧人小説、個人的牧人小説といったように細区分しようとするとは簡単ではなくなる。Meyer はその牧人小説があらかじめ予想された特定の読者（貴族や文学者仲間）を対象とし、社交的色彩の濃いものであるか、それとも作者個人の内的必然性をもって書かれたものであるのかという点にその規準を求めている⁽¹⁾。しかしこの内的必然性の有無はその是非を別にするとしても、どうしても作品の思想内容にまで立入らねばならず、それだけに評者によって様々な見方が生まれてくる。またそれ以上に問題なのはこうした思想内容の差異はけっして牧人小説という構成上の特徴によるジャンル内での下位区分であってはならないし、思想内容の面から分類するなら、むしろ一部の牧人小説は英雄小説に近いとさえ言えるのであり、牧人小説というジャンル自体が問題とされざるをえなくなる。さきに客観的に分類しうるといった牧人世界を舞台としているか否かという小説構成の点にしても問題がないわけではない。牧人世界が小説の全体をなすのか、あるいはたんなる一篇、一挿話にしかすぎぬのか、またさかれたページ数がたとえわづかでも牧人世界がその小説を解釈する上で決定的なものとなっているのかどうかなど人により相違が生まれる。たとえば H. G. Rötzer は従来のように Zesen の「Adriatische Rosemund」を牧人小説として扱うことをせず、特に Bürgerlich-höfische Mischform という項で扱っている⁽²⁾。

この小論は表題を「17世紀の牧人小説」としてはいるが、牧人世界が描かれている散文作品群という以上のことを考えてはいない。いわば17世紀の散文に取付くための便宜と 考えており、むしろ牧人小説と一般に呼ばれている作品群を語ることで、17世紀文学の諸特徴に通じていきたいと考えている。というのも今日の読者にとって17世紀の小説はけっして馴染み深いものではなく Lessing 以降の文学とは乗り越え難い一線を有しており、あるときはその奇抜さ、荒唐無稽さに戸惑い、またあるときはその単調さに苦しめられるのも事実であって、Lessing や Goethe を読むようにして17世紀の小説を読むことはおそらく困難であろう。たといいくつかの例外はあるにせよ、そのほとんどが登場人物の、ひいては作者自身の内面をうかがわせてはくれず、いきおい牧人小説という悪漢小説や英雄小説に比して量的にも少なく、ささやかなジャンルをさしあたっての手掛りとせざるをえなかった。今日直接的な関心をひきはしないこうした小説が当時多くの人々に読まれ、楽しまれていたのもまた事実であり、なぜ書かれ読まれたのか、当時作者は作品創造においてなにに一番腐心し、人々は文学になにを一番求めていたのかを知ることは、17世紀の文学が今では最早死んでしまったものとなっているだけに必要なことと思われるのである。

II

いづれにせよ牧人小説とは田園世界を舞台にした小説という以外の何物でもないのだが、テオクリトスやヴェルギリウスの昔から文学に現われた牧人世界に共通しているのは、たとえその世界が様々な異なっているにしても、現実ではかなえられぬ願望や憧れが現実世界のアンチテーゼとして牧人世界という詩的空間において顕現されてきたということである。牧人世界では実現不可能なことが可能となり、現実への不満が満たされるのである。それ故現出された牧人世界を観察するなら、逆に夾雑物なしに投影された現実の倒立像をより鮮明に見て取れるのではなからうか。

こうした牧人世界という詩的ユートピアについては小説の序文は多くを語っておらず、個々の小説に詳細な検討を加えるよりほかはないのだが、ひとつの例を Montemayor の『Diana』を翻訳した Harsdörffer の序文からうかがうことができる。

こうした好ましい文学ジャンル（牧人文学）によって造り上げられるものは原初世界という黄金時代である。そこでは人は牧畜を営み、名誉欲も金銭欲ももたず、たいそう満足して暮していた。[.....] 実際のところ人間本来の性質には国を荒廃させる戦争や、都市や宮廷の罪悪より、平穏な汚れない農耕で糧をうることの方がよりふさわしいのである⁽⁴⁾。

Harsdörffer は現実を批判し、黄金時代にしかユートピアはないとして、その古き良き原初

世界が描かれるのである。しかしながらこの『Diana』が批判し否定した現実とは既存の秩序そのものではない。なるほどそこでは人々は名誉欲も金銭欲ももたず、都市や宮廷でのような複雑な身分的束縛もない。戦いはなく、歌をうたい、笛を楽しみ田園で汚れない生活をおくっている。しかしこの原初的な田園生活は主人公にはそのままあてはまるものではない。主人公は牧人の身なりをしてはいるが、かれらの行動様式は騎士的貴族的であって、都市や宮廷における道德観倫理観に支配されている。牧人世界においてもまた「貴族の役割は現実世界における役割と同じ型をとっている。つまりそれは封建社会層が優位な世界なのである。⁽⁴⁾」それどころか牧人世界ではかれらの行動は現実にもまして自己抑制や支配能力を充分に発揮しているのである。恋人同士のすれ違い、様々な悪人たちの陰謀や冒険、そしてそれらの克服。そのどれもが主人公たちの徳の不変性を証明するための試金石となっており、Sidney の『Arcadia』の主人公も牧人に変装はしているが元来貴族であり、かれらはすべての難題を貴族的騎士的に振舞うことで解決するのであり、旧来の道德観倫理観の完全な姿が展開されるのである。

この『Diana』やあるいは Sidney の『Arcadia』などと類似した梗概をもつ牧人小説はスペイン、イギリスなどからの翻訳によってドイツに入ってきたものであるが、翻訳によらぬ、『Diana』や『Arcadia』とは際立った対照を示している牧人小説がある。『Damon und Lisille』や Zesen の『Adriatische Rosemund』がそれである。『Adriatische Rosemund』は先に述べた『Diana』や、Sidney の『Arcadia』のような牧人小説とは違って、恋人同士のすれ違い、悪人の陰謀、そしてあらゆる苦難を乗り越えての結婚というおきまりの筋書きをたどらない。『Adriatische Rosemund』の主人公たちは最後まで結ばれぬままであり、ドラマチックな筋立てにはなっていない。主人公は完全無欠な人物でも、英雄的人物でもなく、語られるのは国家的人物が主人公であった『Diana』や『Arcadia』とは違って、ユンカーの個人的出来事であり、そこでの感情である。

『Diana』や『Arcadia』に代表される牧人小説にとってはひとつひとつの事件はなんら有機的連関をもたず、モザイクのように結び合い、道德的効用を検証するための道具立てになっていた。しかし『Adriatische Rosemund』や『Damon und Lisille』での出来事は個人的関係から生じており、それぞれに因果的連関がある。しかも『Diana』や『Arcadia』の田園世界が主人公の完全無欠な貴族的振舞いの正当性を立証する場であったのに対し、『Adriatische Rosemund』や『Damon und Lisille』での田園世界は自己の正当性を立証してくれる場でも、様々なドラマチックな筋立てのある世界でもない。そこは生活に疲れたとき、現実から逃避しうる唯一の場になっている。牧人世界のみが不幸の忍び寄せ、幻滅を知らぬ、自己の心情のままに行動できる新しい生活空間としての機能を果たしているといえる。「こうした牧人小説はただたんにその素材によってのみ国家小説、恋愛小説と区別されるものではない。それは精神的にことなつた構造の人間タイプを示しているのである。つまり非宮廷の人間、非宮廷的運命、非宮廷的精神状況を示しているのである。この牧人小説にはとりわけ宮廷的文化の特徴である生の倫理的様式化が欠けている。つまり宮廷のエートス、それとともにこうした文化

にとって決定的である人間の態度をも欠いている。⁽⁶⁾」

以上述べてきた二つの大きな牧人小説の流れのほかに、ことにドイツでのみ流行したドイツの言語状況が生んだともいえる Opitz の『Schäferei von der Nimfen Hercinie』に代表される牧人小説がある。これは構造の点においても、内容においても『Arcadia』や『Adriatische Rosemund』のどちらにも属しえず、Meyer が社交的牧人小説と呼んだものである。詩人たちのパトロンでもある王侯貴族を讃えたり、詩人仲間で詩作を競い合ったりするのに好んで用いられた形式である。『Hercinie』は主人公があるきっかけから田園世界に入り、そこで輝しい貴族の由来を知り、それを詩人仲間で詩いあうといったものである。それは美しい故郷の山々であり、妖精の住む水晶や宝石で造られた夢幻境であって、政治的社会的ユートピアが現実批判として現出されるのではない。Opitz たちは故郷をうたったり、愛と分別について語ったりで理知的で遊戯的な詩作に興じて時をすごす。ちょうど『Arcadia』の主人公が終始貴族的な役割を演じていたのと同様に、Opitz たちは田園世界では現実同様に、むしろ現実以上に詩人として振舞い続けている。現実では一介の官吏であるかれらがここでは自分たちの詩を貴族たちの碑銘にすべくうたい、故郷の自然を讃え、詩作に興じるだけで時をすごすことができるのである。つまりなによりも詩人であることを望み、それが現実では果されていないが故に田園世界でそれを実現しているといえる。しかし田園世界内での詩作とはまさにユートピア的詩作であって、現実社会と自己とを探るような詩作ではない。テオクリトス、ヴェルギリウス、あるいはサナザロが巧みにとり入れられたギリシャ、ローマがドイツ語の中で融合したような、あるいはまた主人公たちの会話で示されているような博学で理知的な文学世界なのである。現実社会から切り離されたところで修辭的教養的色彩の濃い詩的世界が繰り広げられているのである。

III

以上三種の牧人小説はその恋愛の扱い方を見ると、それぞれの相違がより明瞭になってくる。

まず『Arcadia』のように貴族が牧人に変装するような牧人小説では愛は徳と忍耐とに裏打ちされてはじめて高尚な真の愛になるという恋愛観が拘束力を有している。愛はそれ自体価値をもつものではなく、倫理的体系のなかにしっかりと位置づけされているのである。愛は徳や永続性のみならず、身分とも密接に結びついており、そのうちのひとつでも乱すならそれはけっして真の愛とはなりえないのである。相愛の二人の行動は個人的恋愛感情から起きるのではなく、常に大義名分が優先する。大義を果たしうる愛こそが真の愛と呼ばれるのである。かれらの恋愛行動とはあらかじめ用意されたすれ違い、陰謀などのプログラムに従ってのそれであり、作者の言わんとする倫理的体系の有効性を実証するための優美な道具なのである。それ故にその結末は一樣に相愛の男女が結ばれて目出度く締めくくられるのである。

一方『Adriatische Rosemund』のような牧人小説の恋愛は対照的である。語られる愛は理想的な倫理的・道徳的効用を説くための恋愛記述ではない。それは市民的日常生活の中で描かれており、個人的な怒りとか嫉妬といった、あるいは感情の微妙なくい違いといった恋人のことが描かれている。あるいは『Damon und Lisille』では一組の夫婦が会う、息子の死、妻の病氣、家の焼失といった出来事が日常的な中で語られている。ごく普通の夫婦の関係が書くに価すると考えられているのである。日常的な故に、冒険あり陰謀ありといった波瀾万丈の筋にはなりえず、ややもすれば単調である。しかし『Adriatische Rosemund』にしても、『Damon und Lisille』にしてもそうした愛であるが故にその愛は主人公の内面にはね返ってくるのであり、主人公はそれなりに統一のとれた個性を獲得しえているといえる。

Opitz の『Hercinie』の愛は今迄述べたどれとも異質である。ここでは牧人たちはあくまで詩人であり学者であってすべての人間の行為を理性的に考察するだけであり、かれらは傍観者である。愛が小説の重要な筋をなすのではなく、その意義を一時友と語り合えるなら主人公たちにはそれで充分なのである。恋愛はかれら学者詩人 (der gelehrte Dichter) の知性のための一対象でしかない。かれらにとっては恋愛に限らず、すべてがかれらの哲学的考察を加えるための対象でしかなく、かれら自身が直接的行動をとることはなく、ただ故郷の山々を歩き回りそこで出会ったことをうたうだけである。強いて言うなら理知をうたうための恋愛考察であり、かれらの知性を示すための道具立ての一つなのである。理知と愛とは深く結びつけられ、理知のない愛は片輪であり、情熱一方の愛は一時の慰みにしかならぬと、いわばプラトンの愛を称賛するのである。

IV

やや図式的にすぎるきらいはあるが、これら三種の牧人小説の相違はただたんに牧人小説の種類というにとどまらず、17世紀ドイツの社会状況および言語、文学状況をそのままに反映した興味深い相違を示しているように思われる。

たとえば『Arcadia』に代表される牧人小説はヨーロッパ諸国で16世紀に隆盛し、その最盛期をすぎて、17世紀になってからドイツに翻訳されていったものであるが、そこでは貴族たちの役割が十全な姿で発揮されていた。

この作品にはあたり前のことはなにも、どこにもなく、すべてがたいそう高尚で荘麗である。ひと言でいうなら君主的さえある。それは梗概や素材そのものからすぐに見てとれる。ここでは称賛に価するほどにすべてのことをなすたいそう高貴な人々（それが名を秘めた牧人にせよ）の純粋有徳で堅忍不拔の愛がとり扱われている⁽⁶⁾。

この序文の示す通り、あたり前のことを書く意図は毛頭なく、現実にはありえぬ⁽⁶⁾ 高尚、で

「莊麗、で「君主的、な「高貴な人々、を造り出すことが意図されているのである。日常的ではなく異常な、個人的感情をではなく、大義を説くための文学であり、たとえ日常的個人的感情と大義との葛藤が描かれるにしても結局主人公は大義名分を択ぶのであり、むしろ日常的なるもの個人的なるものはそのためにあると言ってもいい。しかしあくまでも詩的空間でしかない牧人世界でしか貴族たちの願望が果たしえぬのは、逆に現実にあっては願望は常に願望のままに終始することを意味するであろう。つまり急速に、そしてすでに中央集権化、絶体主義的宮廷化に屈してしまったヨーロッパの封建貴族たちの最早十全な姿では存在せぬかつての貴族社会への願望がこれらの牧人小説によって代弁されていると言えるであろう。

また『Arcadia』などの牧人小説が封建貴族層の願望を示しているとするなら『Adriatische Rosemund』などは富裕市民層の意識を反映したものと言える。『Adriatische Rosemund』の主人公 Markhold はユンカーであり、A. Hirsch の言うようにそれは非宮廷的人間、非宮廷的運命、非宮廷的精神を示している。これは『Arcadia』などの宮廷的理念の観念世界とはまったく異質であり、そこには一富裕市民の自伝的要素が強く作用した恋愛が描かれている。この新しい市民的価値観に注目するならそれは「理想的存在の証明よりむしろ具体的な自己把握の論拠づけに関わった最初の体験文学の試み⁽⁷⁾」と考えられるのであり、自伝的なるが故に『Diana』などに比較して筋の起伏は小さくならざるをえない事情がある⁽⁸⁾。そしてこれらのことから『Adriatische Rosemund』のような牧人小説は18世紀の市民文学へと通じていくものではないのかと考えられるのである。また『Adriatische Rosemund』はその内容面での新しさとどまらず、言語的側面においても興味ある作品である。『Adriatische Rosemund』の作者 Zesen は時には行き過ぎとさえ思われる程の外国語排斥を唱え実行した人物であるが、『Adriatische Rosemund』の序文は次のようになっている。

私はもし人が固有のことを書き、外国語の書物をあまりひんぱんにドイツ語に翻訳しないなら、それが一番だと考えている。というのも多くの場合外国の書物は気が抜けていて、ただ冗長で、整然としない無駄話があるにしかすぎぬからである⁽⁹⁾。

この序文からする限り、Zesen は最早外国から学ぶべきものはなく、ドイツ語は充分外国語に匹敵する詩語になりえていると考えていると言ってよいだろう。こうした自国語への自負は Opitz の『Hercinie』の序文とは著しく対照的である。

この本は少なくとも私以上に才能と時間にめぐまれた人々によって誰もこうした本を考え出そうとしなかった母国語をこの種の有益で楽しい書物でもって、ますます豊かにする機会を与えることでしょう⁽¹⁰⁾。

無論これは Opitz の自作に対する自信をも充分うかがわせるものであるが、それと同時に

Opitz には自国語、自国文学は外国に劣っているという認識がこの根柢になっている。この『Hercinie』が刺激剤となり、自国語自国文学が外国に劣らぬものとなる契機となることを望んでの発言である。Opitz の頃は混乱したドイツ語を詩語にということが最も肝要なことであり、それ故整然としたドイツ語での翻訳は創作なみの評価を受けていたし、またそうした翻訳は多くの人々に受け入れられ読まれていたのも事実なのである。むしろ翻訳が冗長な無駄話しであるとした Zesen と翻訳文学を享受した読者層との間にあるはっきりとした文学に対する姿勢の相違を読みとるべきなのだろう。「もし人が固有のことを書くならば」という条件つきであることから考えるなら、内容面はともかく言語的には少なくともドイツ語は充分外国語に匹敵しうる詩語になっていると Zesen 自身は考えていたと言ってよいだろう。しかもこうした発言が、他ならぬ非宮廷な牧人小説、「非宮廷的な中産階級から生まれた道徳規範の有効領域が示されている⁹⁰」小説の序文においてなされていることは注目し得る。それは Opitz の外国文学の模倣、古典への精通、厳密な詩句構成に支えられた『Hercinie』とは対照的である。Opitz にとっては混乱した言語を浄化し、ドイツ語を詩語にするということがなにもまして重大であり、その手本になるべく『Hercinie』は書かれているとさえ言う。『Hercinie』は本文の四割が韻文で占められ、詩的技巧が様々に試みられ、博識、つまり古典や外国文学に関するの素養が巧みにとり入れられた作為に満ちた文学であった。この作為性や『ドイツ詩学の書』における厳密な詩句構成への要求などのために狭隘な形式主義者とも呼ばれたりするのだが、そうすることを余儀なくさせた、そこから出発するしかなかったのが17世紀初頭のドイツの言語状況であったのである。それ故学者詩人の博学な談論や詩作からなったこの作品がその後好んで受け継がれ、特に言語協会に属していた幾人かの人物がこの形式を模して自らの作品を書いたのも当然のことであり、今日ほとんど省みられることのないこうしたささやかな牧人小説もドイツ文学史において17世紀を考える際に看過しえぬものであろう⁹¹。

V

これら三種の牧人小説を17世紀ドイツの言語状況、文学状況の側面からみるなら、文学的にも言語的にも劣ったドイツが当初その大半を翻訳に頼り、その翻訳者たちがその一方で『Hercinie』のような少なくとも形式的には自前の作品を仕上げていき、そして『Adriatische Rosemund』のような作品が生まれてきたということが言えるし、また社会的側面から見れば封建貴族層の低落から『Arcadia』などの作品が、富裕市民層の抬頭からは『Adriatische Rosemund』のような作品が、あるいはまたその間にあって学識により市民出でありながら貴族に叙せられるまでになった Opitz のような宮廷依存の学者詩人たちの『Hercinie』のような小説が生まれたと言えるだろう。それは17世紀文学の多様さを示す一縮図であるとさえ言える。

(注)

- (1) Meyer, Heinrich; Der deutsche Schäferroman des 17. Jhs. Phil. Diss. Freiburg i. Br. Dorpat 1928. S. 10f
- (2) Rötzer, Hans Gerd; Der Roman des Barock 1600-1700. Winkler 1972. S. 74ff
- (3) Harsörffer, Georg Philipp; Diana. S [xvij f]
- (4) Vosskamp, Wilhelm; Romantheorie in Deutschland. Netzlersche Verlag 1973. S. 51f
- (5) Hirsch, Arnold; Bügertum und Barock im deutschen Roman. Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte des bürgerlichen Weltbildes. Köln und Graz 1957. S. 92
- (6) Vosskamp, W; ibid. S. 48f
- (7) Rötzer, H. G.; ibid. S. 56
- (8) Kaczerowsky, Klaus; Bürgerliche Romankunst im Zeitalter des Barock. München 1969
- (9) Theorie und Technik des Romans im 17. und 18. Jhs. Hrsg. v. D. Kimpel & C. Wiedeman. Max Niemeyer 1970. S. 6
- (10) Opitz, Martin; Schäfferey von der Nimfen Hercinie. RUB8594. S. 8
- (11) Hirsch, Arnold; ibid. S. 116
- (12) 拙稿「社会的牧人小説について」(「Angelus novus」第2号所収)

(注) 以外のテキスト及び参考文献

- Das Zeitalter des Barock. Hrsg. v. A. Schöne (Die deutsche Literatur Texte und Zuegnisse 3) 1963 C. H. Beck
- Schäferroman des Barock. Hrsg. v. K. Kaczerowsky. RK530/531 1970
- Deutsche Romane des Barockzeit. Hrsg. v. K. G. Knight. Methuen 1969
- Zesen, Philipp von; Die Adriatische Rosemund. C. Schunemann 1970
- Cholevius, Leo; Die bedeutendsten deutschen Romane des 17. Jhs. Darmstadt 1965
- 巒田収 ; 「17世紀における文学の規範と文学への要求」(「ドイツ文学」50号 1973 所収)

Der Schäferroman des 17. Jahrhunderts**EIJI FUKUZAWA**

Der Begriff der "Schäfferey" gehört der Tradition der arkadischen Literatur seit Theokrit und Vergil und der Wiederaufnahme in der Renaissance. Die "Schäfferey" bildet meistens die utopischen Wunschräume, in denen sich die Sehnsuchtsvorstellungen der Wirklichkeit ausdrücken. In besonderem Maße zeigen die Möglichkeiten unterschiedlicher Funktionen des Arkadischen die Schäferromane des 17. Jhs, die der "Schäfferey" eine jeweils unterschiedliche Rolle zuweisen.

Sidneys "Arcadia" z. B. ist die mit höfisch-historischem Roman unmittelbar verknüpfte Schäferwelt, in der sich die Hauptpersonen vollständiger und adliger

als in der sozialen Welt betragen. Die verschiedenen Abenteuer und Verschwörungen, alles das wird zu den Kriterien, wodurch sie ihre Beständigkeit der Treu und Tugend beweisen. Die im poetischen Raum bewiesene Beständigkeit der Treu und Tugend bedeutet, daß sich die Beständigkeit in der wirklichen Adelsgenossenschaft nicht mehr hält und nur der Wunsch des Aristokraten ist. Es läßt sich wohl sagen, daß sich Sidneys "Arcadia" als "eine Enklave des Rückzugs für politisch Besiegte oder vom politischen Handeln Abgeschnittene erweist" (Voskamp), da Sidneys "Arcadia" die Sehnsucht nach der nicht mehr liegenden Adelsgenossenschaft der bereits der absolutistischen "Verhofung" unterliegenden Grundherrn darstellt.

"Nimfen Hercinie" von Opitz unterscheidet sich von Sidneys "Arcadia", in der die historisch-politische Utopie zum Vorschein gebracht ist. Für "Nimfen Hercinie" ist es charakteristisch, daß sich die Helden (Opitz, Buchner, Venator und Nüßler) gemütlich als die Poeten verhalten. Opitz malt "Genrebild einer bürgerlichen gelehrten Nachmittagsgesellschaft, die sich aufs Versmachen verlegt hat. (Rötzer). Dadurch ist der Wunsch der Helden verwirklichtet, die in dem wirklichen Leben nur gelehrte Beamte sind. Aber die Schäferwelt ist die Utopie für die rethorische Dichtung, in der die Poeten Ausdrucksweise oder Redewendungen nachstreben und sich einander die Gelehrsamkeit anzeigen. Darin gibt es weder die psychologische Schilderung noch das innere Geständnis. Nur die Artistik fällt auf. Diese dichterische Haltung entspricht aber den literarischen Anforderungen der Zeit, in der sich der Dichter um die Sprachreinigung bemühen und gern oder ungern vom Hof abhängig sein muß. Opitz sagt in der Vorrede von "Hercinie", „(also) wirdt sie (Hercinie) doch zum wenigsten anderen / denen beßere gaben vndt mehr zeit als mir verlihen sindt / hoffentlich anlaß reichen / vnsere sprache / darinnen sich vormals keiner dergleichen zue erdencken / bemühet hatt / auch mit dieser nicht weniger nutzbaren als lustigen art schriften mehr vndt mehr zue bereichern." In der Zeit von Opitz war es die drängende Hauptfrage, wie lustig, wie nutzbar man auf deutsch schreiben kann.

Aber Philipp von Zesens "Adriatische Rosemund", die 15 Jahre später als "Hercinie" erschien, steht in auffallendem Gegensatz zu "Hercinie". Zesen spricht, "ich halt' dafür, daß es wohl das bäste wäre, wan man was eignes schreibe, und der fremden sprachen bücher nicht so gahr häufig verdeutschte, sonderlich, weil in den meisten weder kraft noch saft ist, und nuhr ein weit-

schweiffiges, unabgemässenes geplauder in sich halten." Man kann das Selbstvertrauen lesen, daß es die Sachen nicht mehr gibt, die die deutsche Literatur aus den Fremden erlernen soll, und daß die deutsche Sprache den Fremdsprachen gleich sein kann. Betrachtet man "Adriatische Rosemund", die H. Meyer der Individualdichtung zugeordnet hat, wird der entscheidende Abstand sichtbar, der sich gegenüber "Arcadia" und "Hercinie" ergibt. Die Liebe in "Hercinie" ist nur der Gegenstand der philosophischen Betrachtung. Die Liebesgeschichte in "Arcadia" wird einer bestimmten sozialen Sphäre und einem moralischen ethischen System zugeordnet. Das Liebespaar benimmt sich nach dem sich vorbereitenden Programm, das die Gültigkeit des höfischen normativen System bestätigt.

Im Gegensatz dazu wird keine ideal-typische Liebe in der "Adriatische Rosemund" skizziert. "Sie zeigt einen Menschentype von anderer seelischen Sturuktur: undhöfische Menschen, undhöfische Schicksale, undhöfische Seelenlagen. Im Schäferroman fehlt vor allem die ethische Stilisierung des Lebens, die das Kennzeichen der höfischen Kultur ist, es fehlt das höfische Ethos und damit auch die für diese Kultur entscheidende menschliche Haltung." (Hirsch) "Adriatische Rosemund" wird in einem bürgerlichen Alltag geschildert und ist arm an Ereignissen, weil sie autobiographisch ist. Man darf sagen, daß sie "der erste Versuch einer Erlebnisdichtung ist, die sich weniger um eine Bestätigung idealen Seins als vielmehr um die Begründung eines konkreten Selbstverständnisses kümmert." (Rötzer)

(昭和49年9月24日受理)